

Title	祭りを支える女性たち : 「十日戎」祭りにおける福娘をめぐる
Author(s)	成, 恵珍
Citation	文化/批評. 2009, 1, p. 55-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75744
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

祭りを支える女性たち

——「十日戎」祭りにおける福娘をめぐる——

成 惠珍

0. はじめに

2007年の正月、1月9日から11日まで豊中えびす神社で行われた「十日戎」祭りに、私は外国人福娘として参加する機会を得た。その体験をもとに「十日戎」における福娘を研究対象として取り組むこととする。「祭り」という日本ならではの伝統行事で、外国人が参加することとはめったにないことだろう。日本人は言うまでもなく、外国人であってもよく知っている幾つかの大きな祭りの催しがある反面、日本全国の津々浦々で小さな祭りも行われている。そのような様々にある祭りのなかで、果して外国人が参加している、あるいは参加を認める祭りの割合はどのぐらいだろうか。その答えを得るまえに、もう少し条件をゆるめてみよう。女性が日本の祭りにおいて参加、および役員として役割を占めている祭りはどれほどあるだろうか。まずその祭りと女性に関する答えを得るために、それに関する先行研究を調べた結果、予想外に研究の蓄積が乏しい現状に直面することになった。管見のかぎりでは、祭りと外国人の関わりはもちろん、祭りと女性を扱った研究はさほどされていない。とはいえ、数少ない先行研究のひとつとして、大阪樟蔭女子大学が2005年から2007年にかけて行った天神祭調査の報告書である、『天神祭と女性』（堀裕他、2007年）を参考にあげてみよう。

『天神祭と女性』は主なテーマとして、天神祭のなかの役割を担当する女性に焦点を合わせている。その天神祭を支える構成員のなかでも、女性の構成別分析や視点が各報告者によって書いてあり、様々な視線から女性の様子をみることができる。

さらにいつから天神祭における女性の参加がはじまったのかについて説明されていること⁽¹⁾から、これから祭りにおける女性の意味合いを探る上で、示唆的な研究であるといえる。そのなかでも、「十日戎」の福娘との共通点が見出される、「采女」と「ギャルみこし」に注目してみよう。これらは、10代後半から20代前半の女性たちによって構成されている点や、募集によって選ばれる点が、福娘と似通っているのである。

山本佳代子によれば、采女は元々大阪の有名な遊郭から選ばれた8名の女性が祭りに奉仕した講であり、昭和32年に売春防止法が施行されて以降、その母体は解体される。ま

た、戦後復興をきっかけとして采女が変化を図るなか、もっとも大きな変化は地域の推薦によって一般から選出されるようになったという⁽²⁾。したがって、現在、天神祭の行列で見られる、宮中の女官姿の采女の起源は、遊女であったのではないと思われる。さらに、堀裕によるギャルみこしについての分析をみると⁽³⁾、マスコミから天神祭の宣伝役として報道されているが、ギャルみこしは天神橋筋商店街が作ったものであることから、宗教的な意味をもっていない存在であることが分かる。さらに山本は祭りと女性をみる視点の一つとして、遊女をなかにいれながら探る方法を示している。おそらく祭りと女性を語る最初のキーワードになるものは、遊女という存在ではなからうかと考えられる。

遊女と祭りに関する先行研究としては、塩月亮子の「沖縄における尾類馬行列の歴史社会的な考察」⁽⁴⁾がある。塩月亮子は、沖縄における尾類馬行列が中止された理由として、遊女と祭りのつながりを容認していなかったことを指摘する⁽⁵⁾。ここから、遊女という存在が祭りにおける女性を語るに当たって、重要な意味をもつのではないかと私は思われる。

「十日戎」や福娘そのものに関する研究は、管見のかぎりきわめて少ない。大阪伝統文化総合支援研究委員会によって報告された『大阪府の「十日えびす」』⁽⁶⁾があげられる程度である。したがって、女性や外国人が祭りの担い手である事例はいまだに研究の対象となっていないと思われる。しかし、決して祭りにおいて女性や外国人が役割を果すことがないわけではない。豊中えびす神社の「十日戎」祭りを取り上げることから、これまで、あるいはこれからの日本の民俗社会における女性の位置を問い直すことができるのではなからうか。女性であり、外国人である私が、「十日戎」で役を担ったという意味を、昔から受け継がれてきた日本の祭り歴史のなかで新しい変化の芽生えとして位置づけることができるのではなからうか。

そうした観点から、豊中えびす神社の「十日戎」を中心とした祭りの移り変わりのなかで、福娘の登場から現代までの短い歴史をさぐってみる。そのなかから福娘の位置づけや意味を見出すための糸口をつかみたい。また、福娘の登場と密接なつながりを持つものとして、巫女を取り上げてみたい。本稿では、日本の様々な歴史のなかで登場する、広範な意味を持つ巫女ではなく、豊中えびす神社の「十日戎」で一定期間奉仕を担うために、福娘と同様に募集を経て選ばれる巫女を扱うことにする。限られた意味をもつ巫女を事例としてあげることで、さらに長い歴史をもつ巫女の変遷を発見することができるのではないだろうか。また最後の部分では、福娘の話に戻り、自らの体験をもとに外国人福娘が登場を紹介する場を再構成してみたい。そのなかから、日本の祭りと外国人の間の無定形のつながりを社会の視線から明らかにしてみたい。

1. 「十日戎」における福娘

今宮戎神社の先代宮司であった津江孝夫⁽⁷⁾は以下のように述べた。

松尾芭蕉の芸術論を表すなか、「不易流行」という言葉がある。不易とは非常に長い時期変わることなく存続する状態、つまり基本的永続性を意味している。一方、流行とは、その時々に変わる状態、いわゆる流動性をさしている。祭りというの是不易であり、祭りを彩るための、時による流行を取り入れること。古い伝統を残しながらも、祭りは現代の生活とも相まって存続していくこと。それが祭りにおける「不易流行」ではなかろうか⁽⁸⁾。

先代宮司が考えた不易に相当するものは、昔から現代まで受け継がれてきた祭りであり、そこに当時のやりごとを祭りに取り入れたがゆえに、祭りが現代に至るまで継承されることができたという意味であろう。ここで注目されるのは、わざわざ松尾芭蕉の「不易流行」をあげながら、さらに取り上げようとするものがあることである。それは福娘そのものである。「不易」というのは「十日戎」であり、「流行」に相当するのは福娘である。それは、おそらく先代宮司が福娘の発案者であるからこそ言えるものではなかろうか。

しかし、本稿では福娘の発祥地とも言える「今宮戎神社」はいったん脇に置き、次項からは、外国人福娘を初めて登場させた神社であり、私が福娘として奉仕を担当した体験のある、豊中えびす神社を中心とする福娘の様々な話を紹介する場としてすすめていく。

1. 1 福娘の登場

豊中えびす神社における福娘の誕生を述べるためには、豊中えびす神社の誕生の年から、「十日戎」の来歴を知る必要がある。そのために現在豊中えびす神社の宮司として勤めているK宮司（現2代目、2006年から宮司を勤める）から2007年9月28日と11月19日、2回に渡って直接話を聞いた。話を聞いた結果を整理するため、豊中えびす神社の「十日戎」や福娘について述べる前に、豊中えびす神社の歴史を略述しておく。

豊中えびす神社は、昭和25年、西宮えびす神社から御分霊され、次の年である昭和26年から「第1回福娘」の募集が始まる⁽⁹⁾。当時、応募した女性は主に豊中えびす神社の周辺、つまり豊中市内に住む若い女性が大半を占めたという。しかし、あくまでも応募は名目上であった。実際には「十日戎」を支える講員と関係のある親族の女性や娘が主に勤めたという。そのため、参加した女性の居住地は豊中えびす神社の近所の住民であった。

しかし、「十日戎」の催しとともに、福娘の話題が徐々に広まっていくことになる。神社が阪急沿線⁽¹⁰⁾の近くに位置し、阪急梅田駅から発車する宝塚線の各駅の宣伝を用いることが容易であったことが有利に働いたと考えられる。各駅の人通りのところに貼られた「十日戎」の福娘募集用の宣伝文句から福娘の話題がより広まったのではないかと推測される。現在でも「十日戎」が催される前から阪急宝塚各沿線にはえびす神の顔を中心とした、豊中えびす神社の「十日戎」の宣伝ポスター⁽¹¹⁾が貼られていることが目立つ。そのような宣伝もあり、福娘に応募する女性たちの居住地域が拡散していく。その結果、現在、豊中えびす神社まで通勤することができる距離に住む女性まで応募するに至る。すなわち、豊中えびす神社の近所から近畿地方まで応募者が拡散することになったわけであるし、大阪府内、あるいは豊中市民のみという居住地の限定はされていないことがわかる。そのことから、戦後はじまった他のえびす神社と比べて、参拝者30万人を越える賑やかな祭りとして確固とした位置を占めていくことになる。

ここからみると、豊中えびす神社の「十日戎」が昭和26年からスタートしたのと同時に、福娘が登場していることがわかる。しかし、他のえびす神社においては必ずしも「十日戎」の催し＝「福娘」という図式が成り立っているわけではない⁽¹²⁾。さらに福娘が奉仕役として存在しているかどうかの問題まで引き伸ばしてみると、大阪府内57ヶ所のなかで、半分ほどのえびす神社においては、福娘が存在していない。また、福娘が登場した年が神社ごとに違うことは大阪伝統文化総合支援研究委員会の調査報告書からすでに言及されていることである⁽¹³⁾。

その報告書からみる大阪府内のえびす神社は、「十日戎」の催しに共通する特徴をもちながらも、違う部分をいくつか見つけることができた。そのため、えびす神社の全部を取り扱うことは今後の課題として、そのなかでも福娘が強調されている「十日戎」をいくつか選別して述べ続けるかたちにしておきたい。

1.2 福娘の選考基準

福娘はどのようなプロセスを経て選ばれるのだろうか。その福娘の募集から選抜までのながれを紹介しながら、福娘とはどんなものであるかを確認しておく。

豊中えびす神社における福娘の審査基準を述べる前に、福娘の募集紙に記載された応募資格および奉仕内容、選考方法、応募方法をあげてみよう⁽¹⁴⁾。

< 応募資格 >

- ・満 18 歳から 25 歳までの健康で明るい独身の女性であること。
高校生は不可である。
- ・ 9 日、10 日、11 日の 3 日間確実に奉仕できる方
- ・過去に豊中えびす祭福娘に選ばれていない方

< 奉仕内容・そのほか >

- ・時間内用： 午前 10 時～午後 10 時 各吉兆の授与などの奉仕
- ・奉仕料： 1 日 1 万 8 千円（二食付）
- ・ 3 日間のうち 1 日は、着物姿による奉仕となる。

< 選考方法 >

- ・第 1 次審査（書類選考）
- ・第 2 次審査（面接） *第 1 次審査の合格者にご案内する
- ・第 2 次審査日 平成 19 年 11 月 23 日
- ・審査会場 豊中市民会館（阪急宝塚線曾根駅下車）
- ・合格予定者数 福娘 27 名

まず、福娘になる資格からみても、年齢の制限はきっちり定まっている。それから主に選ばれる女性の多くは大学生が多いことが占めている。しかし、大学生ではない働く女性の応募者も少なくないという。また高校生は不可であるということは、奉仕する福娘の時間帯が 1 日 12 時間奉仕する点や、夜遅くまで奉仕する点から、高校生を制約するのではないかと思われる。また「十日戎」の 3 日間奉仕ができる方というのは、寒い正月の 3 日間、屋外で長時間の奉仕が必要であることから、頑丈な女性を求める意図が含まれている。最後の条件は、過去豊中えびす神社での福娘の経験がない女性のみである。ただし、他のえびす神社での福娘の役を果した女性は可能である⁽¹⁵⁾。

また、加藤宮司が語る福娘とはどんなものかを紹介してみる。これは、豊中えびす神社が考える福娘に相応しい審査条件であるといえよう。

2007 年 9 月 28 日に行った 1 回目の聞き取り調査から、加藤宮司はまず声が誰より大きい女性。そして爆笑が特技であるような、笑顔が素敵な女性。また、誰にでも福を授けられるような福々しい顔を持つ女性が審査条件であると語る。声が大きい女性が基準になっている理由はえびす神のためである。「えべっさん」は耳が遠いので声がよく聞こえないため、より大きい声で神社の北の方に居眠りしている「えべっさん」を呼び起こせる女性

が第一の審査基準と説明する。また素敵なお顔という基準はいずれの面接の審査基準にもなる要素であるが、なるべく「えべっさん」のお顔が思い浮かぶような顔を持つ女性が好ましいという。最後の審査基準は笑顔の理由と同様に「えべっさん」のような福々しい女性を択ぶ理由である。その三つの審査基準は「第1回福娘」からずっと変わっていない基準であるという。

上記のような審査は「十日戎」が行われる前年の10月中旬頃に実施される1次書類審査の後、第2次の面接審査から適用される。面接審査は豊中市民会館で11月中旬頃行われる。面接審査については自らの体験を思い浮かべながら、若干述べてみよう。

2006年における「2007年度豊中えびす神社福娘の面接選考」では、豊中えびす神社と関わりのある「えびす講」⁽¹⁶⁾の構成委員を中心に審査を行う。10名ほどの60代から70代にかけての男性のみで構成された審査委員は「えびす講」の構成委員である。その委員たちは豊中えびす神社における祭り、特に「十日戎」において、準備段階から開催および終了まで様々な役割を担っている、もっとも重要なメンバーである。実際、当日の「十日戎」の風景を見てもよく見かけられるし、「十日戎」の縁起物の売り上げやそれに関する金銭的な部分へ関わっている重要な役割を果す存在として位置づけられている。

再び、面接審査のところへ戻ってみよう。第1次書類審査を通過した約300名の福娘の応募者の女性たちは1日間の面接の間、15分ごと約15名の女性が同時に面接を受けるので1人に与えられた時間は約1分であろう。15名の女性は一列に並べられ、各審査員の質問に答えたり、自己PRをしたりする。面接の質問は募集紙に掲載された通り、声の大きさや、笑顔（自然であれ、作られた笑顔であれ、とにかく笑顔を見せる人が選ばれる可能性が高い）を見るために、祭りの当日に使う歌や挨拶用コメントを言わせられる。そのような審査の結果、700名の近くの応募者のなかから300名、さらにそのなかから36名の福娘が選ばれることになる。この36名のなかから、5～6人にミス福娘のタイトルが与えられる。ミス福娘は、豊中えびす神社に対するマスコミの取材や周辺への宣伝を担う栄光の役である。

1. 3 福娘の装束と役割分担

「十日戎」の当日において、もっとも際立つのは福娘であろう。その理由は、福娘が身にまとう装束である。頭の上から被った金烏帽子の輝きや華やかな彩りの着物の上には、さらにひらひら羽のようにまろやかな淡い黄白色の千早（豊中えびす神社においては白装）姿。右手で福鈴を持ち、左手のひらには福鈴の下とつながっている五色の紐を静かに載せ、静かに福鈴を振ると音がチャランチャンと響く。そのような様子の福娘をみた参拝

者たちは、いかにも今年の福運は大吉であろうと感じるだろう。それが「十日戎」の3日間の間の福娘の装束である。

値の高い縁起物を買上げた参拝者には、それに応じて福娘たちが特別なわざを演じてみせる。近くにいる福娘がいつのまにか輪を作りながら参拝者を中心に囲む。そして、一斉に手を叩きながら「大阪締め」を歌ってあげることで、買いあげに対する感謝の気持ちや今年の福運に導かれるような祈願を表す。それから参拝者は満足したような笑顔で引き上げることになる。それが、「十日戎」において福娘が担当することである。上述した装束以外の福娘たちは、赤いジャケットの上にはハッピーを着用し、縁起物売りの奉仕を担当する。約30人の福娘は3日間の催しのなかで着物の装束は1日間であり、2日間は赤いハッピー姿で奉仕を担う。

そのように、二つのパターンで装束を分けた理由はなぜだろうか。それについては現在「えびす講」の役員で17年間豊中えびす神社と関わっている田中理一氏から2007年11月19日、話を聞くことにした。田中氏は以下のように述べている。

福娘は「十日戎」の当日に2つの役割を果たさなければならない。1つ目は参拝者に福を与えるように見せるための奉仕であり、2つ目は参拝者が縁起物を買うときにうまく買い上げをするための奉仕である。前者は華やかな着物姿の福娘が、後者は赤いハッピー姿の福娘が担う。

「みんなが着物を着用すれば、もっと立派な光景になるかもしれないが、やはり縁起物の買い上げの奉仕も重要。だから立派な姿では縁起物売りには差支えがあるから。」と田中氏は話した。

以上、福娘の衣装で分けられた奉仕の内容からみると、福娘は参拝者に福を与える存在として、眼に見えない福運がきちんと伝わったという感じが見えなければならない。さらに縁起物という眼に見える媒体を通して福運が伝わったことを見せなければならない。前者の役割は金烏帽子を被った福娘のものであり、後者は赤いハッピー姿の福娘が担当する。そのような無形の福と有形の福を取り仕切ることが福娘の奉仕の役割ではなかろうか。ただし、装束によってかたちのあるものとかたちのないものを区分することができる。

金烏帽子を被った福娘の装束についてはまだ疑問が残るが、起源やそれが持つ意味などは今後の課題としておく。

2. 「十日戎」における巫女

「十日戎」が催される当日には、福娘以外にも、若い女性が見かけられる。主に建物のなかで活躍する巫女さんである。豊中えびす神社の「十日戎」における巫女さんについて

は、まだ資料不足のため、はっきりしたことは言えない。そのため、より詳しいことは今後の課題としたい。しかし、福娘について述べるためには、巫女への存在は欠かせないものである。というのも、今のところ神社における女性、つまり戦後から生まれ始めた福娘そのものの起源がまだ明らかになっていないからである。それとは違って巫女は日本の大昔から存在していることは言うまでもない事実であり、巫女を通してより福娘の意義が出てくるのではないかと推測する。そうした観点から、つぎには豊中えびす神社における巫女さんを若干ながら紹介しておきたい。

現在、豊中えびす神社では常勤の巫女さんが1人いるほか、正月や十日戎などの行事があるときごとに募集を通して巫女さんを選ぶかたちをとっている。2006年9月28日、豊中えびす神社を訪れたときに、神社の入口では福娘の応募紙とともに巫女さんの募集紙が貼られているのが目に入った。

次には福娘の募集紙の内容と似通いながらも違う巫女さんの募集紙の内容を引用してみよう⁽¹⁷⁾。

< 応募資格 >

1. 満18歳～25歳までの元気で明るい未婚の女性
2. 高校生、茶髪は不可

< 奉仕期間・内容 >

1. 期間 12月31日～1月3日
1月9日～11日の数日
2. 内容 御守、御神酒の授与などの奉仕

応募制限からみてみよう。18歳から25歳までの未婚であるという年齢の制限が定められている。また高校生は応募できないことや奉仕を担当することは福娘と同じである。しかし、巫女さんにはもうひとつの制限が与えられている。髪の毛の色の制限がそのものである。巫女さんの募集では外見の様子の制限がはっきり書いてあり、それは福娘とは違うところである。さらに奉仕の期間が12月31日から1月3日の間と1月9日から11日の2つに分けられている。前者の期間は初詣の期間であり、後の期間は「十日戎」の期間であることは間違いないだろう。巫女さんは「十日戎」期間以外にも初詣の期間中に役割を果たすものである。が、福娘は「十日戎」だけ役割を果たすものであることが伺える。

ところで、えびす神社の総本社である西宮神社では福娘が存在していないことは、知る人ぞ知ることである。その西宮神社では、初詣や「十日戎」で務める大勢の巫女さんが募

集されており、その数は140人にのぼる⁽¹⁸⁾。選ばれた約140人は研修期間を経て1月1日から3日までの初詣と、1月9日から11日間の「十日戎」の奉仕を担当するという。

また話を引き戻し、豊中えびす神社での巫女さんについてのべてみよう。巫女さんと福娘との相違点をいくつか検討してみると、巫女さんは「十日戎」に関するマスコミに一切触れていない。つまり、宣伝の役割を果さない存在が巫女さんである。「十日戎」当日にも活発に社内を行き来する福娘とは違って、建物のなかで静かに参拝者を迎えている。

また、福娘と巫女さんは同じような装束をしていると思われる部分が多いし、応募資格を比べてみても大した差はないかのように見える。だが、福娘と巫女さんの間には大きな差が存在している。それについて加藤宮司の話をさらに引用してみると以下の通りである。

福娘は誰でも応募することが出来る。それが外国人であっても。従って、国際交流になる外国人は、さらに福娘に相応しい。ただし、巫女さんに応募するというのは、誰でも応募できるというわけにはいかない。やはり巫女さんは天照大神の系統の存在だし、外国人が応募できるなんて、それは周りの人にも名目が立たない。

果たして、神社が求める福娘になるものと巫女になるものはどう違うだろうか。それについての疑問の答えは今後の課題にしたい。

3. 「十日戎」における外国人福娘の登場

最後の章では、豊中えびす神社における外国人の福娘を紹介しながら、当時の新聞記事も引用してみる。そのなかから外国人福娘をめぐる周囲の反応を読み取ろうとしてみる。また日本の祭りとのつながりを通して、それがもつ意味を掘り出してみる。

3.1 イギリスからの福娘

豊中えびす神社における初めての外国人福娘が誕生するのは、1996年に遡る。イギリスのK大学から大阪のS大学に留学し、当時、豊中えびす神社の近所の一般家庭でホームステイをしていた、Aさん（当時21歳）は、日本の文化にも興味を持ち、様々なプログラムに参加する留学生であった。日本の家庭でのホームステイに参加していたとき、新聞に掲載された「福娘」の募集紙を見つけ、応募することになる。福娘の役として外国人が応募をしたことはかつてなかったという。つまり、大阪府内における「十日戎」の福娘に外国人が応募したのは初めてだったのである。そのようなAさんの応募を目につけたのが、現在のK宮司である。元々国際的な意識を持っていたK宮司は、外国人福娘を日本人女性

のなかに入れてみると、参拝客や近所の反応はどうなるかを考えた。そして、外国人が福娘として「十日戎」を盛り上げる役になることを期待し、積極的に外国人福娘の起用をすすめることにした。しかし、宮司以外にも「福娘」の選考委員たちの10人の意見を反映しなければならない。その10人の選考委員に外国人福娘についての意見を聞くと、外国人が福娘になることは「よい見物」とする意図を示した意見もあった一方で、「祭り」に外国人が参加するのはごちないという意見もあったという。しかし、加藤宮司の積極的な意志もあり、選考委員のなかでも大した反対意見もなく、「とりあえず、入れてみよう」という気持ちでアリソン氏を受け入れることになったという。その結果、1996年外国人として初めて福娘が登場することとなり、1997年1月9日から11日の期間中、「十日戎」の奉仕への役割を果たすことになる。それが慣例化して、2007年11回目の外国人福娘が選ばれるに至っている。

3. 2 外国人福娘への騒ぎ

初めての外国人福娘が登場したという話題がどれほどであったのかについては、当時の新聞記事からみることができる。少し長いが、2つの新聞記事を引用する。

なめらかな日本語で自己紹介は毎晩、何度も練習したが、面接官は早口で大阪弁。緊張してうまく言えなかった。選ばれたと聞いたときは「ウソ〜」。ミス・ラッキーガールとしてイギリスの「THE TIMES」紙に報道され、ラジオにも出演するなど母国でも話題に。初めはフクムスメもハットリテンジンも知らなかったのですが・・・(中略)・・・日本文化を専攻する彼女は現在、日本文化全般を学んでいるところ。今は日本人の友達もでき、とても面白いと⁽¹⁹⁾。

豊中市の服部天神宮(服部元町1)で9日から11日まで開かれる「服部えびす祭」の福娘に、イギリスから大阪学院大に留学中のアリソン・ギブソンさん(21)が、外国人として始めて選ばれた。イギリスでは新聞やラジオでも報道されて話題になっており、ギブソンさんは「両国の相互理解に少しでも役立つなら選ばれて良かったと思う」と、出番を心持ちにしている。

六歳の時、ノースロンドン市の学校で親しくなった「ホンダ・マリコ」という同級生の優しさが心に残り、日本へのあこがれを持ち続けたという。・・・(中略)・・・大阪の道路の狭さと緑の少なさには驚かされたものの、歴史と自然が調和する京都や

奈良も回り、ますます日本が好きに。福娘にも「幸せを授ける仕事なら」と応募。チャーミングで落ち着いた雰囲気の評価され、700人の応募者の中から36人の福娘の1人に選ばれた。将来、父親と弁護士となり、日英の懸け橋になるのが夢だけに「閉鎖的と思われていた日本の伝統行事が外国人にも門戸を開いたと好意的に受け止められたと思う」と青い目を輝かせている⁽²⁰⁾。

重複する内容もあるが、2つの新聞記事を読んでもみると、日本の祭りに外国人福娘の登場することについての反応は、少なくとも高位的な感じがする。また、新聞記事のタイトルである「日本人に福を授けたい」や「ステキです。日本の伝統」というのはアリソン氏による感想であろうか、あるいは記者の意図したことであろうか、日本という言葉を強調しているような感じがする。さらに日本だけではなく氏の国であるイギリスでも記事化され、話題になったことがわかる。またアリソン氏の母国の新聞である『THE TIMES』紙でも載せられる。そこでは福娘が「MISS LUCKY GIRL」と表記され、えびす神に関する説明や、「十日戎」日本の文化を知らせる機会になる。しかしそのなかでは初外国人福娘に対するぎこちない感じはどこにも見えてこない。

3. 3 外国人福娘に期待するもの

「十日戎」において、外国人福娘の登場はある程度の宣伝効果を発揮しているのではないだろうか。それは新聞というマスコミで、しばしば今年度の福娘を紹介する記事があり、そのなかでも特に外国人福娘に焦点が合わせられていることがわかる⁽²¹⁾。

そのような外国人福娘に求められることは何であろうか。また日本人が見た外国人福娘という存在はどんなものであろうか。神社と外国人女性の間をつなげる何らかの結節点を明らかにしなければ、両方をうまく説明することは困難であろう。宮司が語ったことを再び繰り返してみよう。彼は、福娘は外国人であるからこそより相応しいのだと述べた。そこからみると、外国人福娘が登場した時点から、日本の神社そのものも、もはや国際化の流れに便乗しなければならなくなっていたのではなかろうか。

いずれにせよ、豊中えびす神社から登場した外国人福娘は、最初に福娘が登場したとき以来の良い話題になり、他のえびす神社でも着々と外国人福娘が登場する現在に至っている。

4. むすびにかえて

以上、「十日戎」祭りにおける福娘の登場から、現在の外国人福娘までの歴史について、きわめて簡略な内容を述べてきたが、そこから今後の研究をすすめていく方法を探る機会

を得ることが出来た。それと同時に疑問も増えてきた。「十日戎」祭りは1月9日から11日までは関西の各えびす神社で行われている。しかしえびす神社の総本社ともいえる西宮神社では福娘は存在しないことや、それとは違って上方文化の中心に位置している今宮戎神社で戦後福娘が登場したこと。そして、戦後から「十日戎」を始めた各えびす神社や外国人福娘が登場したえびす神社まで。今回は様々なえびす神社全てを扱うことができず、限られた神社だけの調査を行った。今後の課題としては、今まで得た資料を踏まえつつ、より視野を広げてそれぞれの特徴をもつ「十日戎」を検討していく。そこからまた新しい展望が開けてくるのではないだろうか。たとえば、商売繁盛の信仰であるえびす神社と近所の商店街との関わりや、さらにマスコミとの関わりを明らかにしてみたい。そのマスコミの例をあげてみると、2007年12月27日午前9時5分から、今宮戎神社における第56回目の福娘の審査が朝日放送（ABC）で放送された。今宮戎神社は朝日放送と協力しながら福娘選抜に取り組んでいることは、すでにABC放送局の女性アナウンサーのなかで福娘出身者が少なくないことから予想することができよう。その放送で自己アピールした女性のなかには、アナウンサーを目指していることを直接的に表した女性もいた。また40人の福娘のなかには4人の外国人福娘も含まれていた。そのほかにも布施えびす神社では賞金を賭けたミス福娘コンテストと、初登場を予定している外国人福娘までマスコミを積極的に用いながら「十日戎」をアピールしている。

また、巫女に応募する女性であれ、福娘に応募する女性であれ、昔から憧れた巫女、あるいは福娘に応募したという話は新聞記事などで必ず出くわしたコメントである。その「昔から憧れた役」は果たしていつから定着してきたのだろうか。そして、マスコミと福娘の関係も。様々な疑問を残しながら、その疑問は今後の課題にしておきたい。

注

- (1) 戦後、男の踊子だけでは足りなくなり、昭和26年ごろから女性も参加できることになる。しかし、実際に女性として参加していたのは男性の講員の親族などの関係者に限られていた。1970年になると多様な女性参加者が増大し、男性講員の関係者というだけではなく、地域的にも拡大していく。また1981年には天神橋筋商店街主催のイベントである「天神祭ギャルみこし」の公募がはじまった。堀裕他（2007）「天神祭と女性をめぐる歴史と現状」『天神祭と女性』大阪樟蔭女子大学地域文化センター、199～201頁。
- (2) 山本佳代子（2007）「天神祭における采女と稚児」『天神祭と女性』大阪樟蔭女子大学地域文化センター、74頁。
- (3) 堀裕他、前掲論文、193～194頁。

- (4) 塩月亮子 (2000) 「沖縄における^{ジュリ}尾類馬行列の歴史社会的な考察——<都市祝祭とセクシュアリティ>研究に向けて——」『生活学「祝祭の100年」』9号。
- (5) ^{ジュリ}尾類馬行列は戦後に復活したが、三回目に突然中止となった。その理由は、女性議員や学校関係者などが「公娼制の名残であり、その祭りを行うことは売春のPRである」と反対したことであった。女性側からの批判で中止になったわけである。塩月亮子、前掲論文、120～121頁。
- (6) 本書では、上方文化を支える目的として「今宮戎神社」を中心に大阪府内に「十日戎」が行われる各えびす神社を調査した結果、建立年度や祭りの開催日、福娘の有無が大雑把に記述されている。ただ、どのように各「十日戎」を行っているかについて簡略的に紹介しているため、不十分な部分も見られる。が、大阪府内の「十日戎」の規模や位置づけを知ることができた。大阪府伝統文化総合支援研究委員会 (2002) 『大阪府の「十日えびす」』HB ネットワーキング。
- (7) 1948年から2000年3月まで今宮戎神社で宮司を勤める。商売繁盛を願って毎年開かれる「十日戎」を盛り上げるため、「福娘」を発案した。2007年10月16日永眠。『大阪朝日新聞』2007年10月17日付。
- (8) 津江孝夫 (1999) 「今宮戎神社と十日戎」『えびす信仰事典』戎光祥出版株式会社、27頁。
- (9) 昭和26年の「福娘」の選抜は昭和25年の11月に行われる。即ち、毎年の「福娘」の選抜は一年前の11月に行うこと。つまり、誕生年度のずれはあるが、神社の誕生と「福娘」誕生は同様である。
- (10) 豊中えびす神社 (旧服部えびす神社) の建立に当たって、初代宮司の加藤知衛氏は阪急の創立者である小林一三から100万円の資金の援助を受けて、昭和25年、本殿の竣工にこぎつけたという点からも、阪急グループとの深い関わりがあるのではないかと考えられる。『産経新聞』2007年11月11日付。
- (11) 阪急沿線において「十日戎」を宣伝するポスターはただ豊中えびす神社だけではない。むしろ豊中えびす神社の宣伝より、西宮神社の「十日戎」のポスターの数がはるかに多く目立つ。
- (12) 各えびす神社において福娘の登場は異なり、人数の差もある。その例として今宮えびす神社では毎年福娘約35名、豊中えびす神社では毎年異なるが、2007年度には35名が選ばれ、2008年には27名の福娘の人数が予定されている。
- (13) 大阪府伝統文化総合支援研究委員会、前掲書。
- (14) 「平成20年豊中えびす祭福娘募集紙」参照。
- (15) 話のズレがあるが、「十日戎」で福娘の奉仕経験のある女性が次の年に他の「十日戎」の福娘に応募することはないわけではない。例えば、豊中えびす神社で同じ福娘の奉仕を担った女性が、さらに今宮戎神社の福娘の面接審査に参加した画像がテレビで映された。その女性は不合格であった。
- (16) 「えびす譚」は、豊中えびす神社の周辺に住む30代以上の既婚の男性で構成された組織である。「えびす譚」に入るためには2人の講師の推薦をうけることが定められている。また「十日戎」の前後に終日の3日間以上手伝いのできない男性は「準えびす講師」として扱っている。そのため、主な手伝いを担当する男性は定年を超えた60代以上である。

- (17) 「平成20年正月・豊中えびす祭巫女さん募集」紙参照。
- (18) 巫女は京阪神から応募した18～23歳の未婚女性、約300人の中から約140人が選ばれた。『毎日新聞』2007年12月24日付。
- (19) 原文そのまま。『リビング北摂』1997年1月 日付は不明。
- (20) 原文そのまま。『産経新聞』1997年1月7日付。
- (21) 例えば、今年は～の国から留学にきた～さんなど、外国人福娘の出身国が最初に置かれている。

参考文献

『朝日新聞』2007年10月17日付。

大阪府伝統文化総合支援研究委員会 『大阪府の「十日えびす」』HB ネットワーキング、2002年。

『産経新聞』1997年1月7日付。

『産経新聞』2007年11月11日付。

塩月亮子「沖縄における尾類馬行列の歴史社会的な考察——<都市祝祭とセクシュアリティ>研究に向けて——」『生活学「祝祭の100年」』9号、2000年

『THE TIMES』1996年12月5日付。

津江孝夫「今宮戎神社と十日戎」『えびす信仰事典』戎光祥出版株式会社、1999年

堀裕他 『天神祭と女性』大阪樟蔭女子大学地域文化センター、2007年

『毎日新聞』2007年12月24日付。

『リビング北摂』1997年1月 日付は不明。